

Title	ジョルジュ・ヴァロアにおける生産と管理：フランス・ファシズムの経済思想序論
Sub Title	La "production" et le "controle de l'Etat" chez George Valois : quelques remarques sur l'economie fasciste en France
Author	小城, 和朗(Oggi, Kazuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.505- 527
JaLC DOI	
Abstract	L'article analyse la pensee economique de Georges Gressent dit Valois (1878-1945). En 1920, economiste de l'Action Francaise, Valois publia "L'Economie nouvelle" ou il se montrait assez clairvoyant: malgre le conservatisme du mouvement auquel il appartenait depuis 1907, il preconisa les methodes nouvelles d'organisation economique et amorca une critique de l'economie liberale classique et de l'economie marxiste. Mais, c'est en 1925, rompant progressivement avec l'Action Francaise, qu'il fit une entree eclatante dans la vie politique avec "Le Faisceau" (le premier groupe fasciste en France) dont le titre complet etait "Faisceau des combattants et des producteurs", le dernier terme indiquait qu'il ne s'agissait pas seulement d'une copie du fascisme italien comme on l'a souvent dit, on peut y discerner un interns pour les techniciens et les schemas technocratiques, surtout quand on examine la programme qui traitait d'organisation economique. On peut dire que toute la pensee economique de Valois se resumait dans cette programme. En fin de compte, Valois affirma avoir reunir une grande equipe de constructeurs pour la creation de l'Etat industriel moderne comme successeurs des saint-simoniens. Ainsi, cet article part du principe que le fascisme francais doit avoir son origine dans le probleme economique. En se fondant sur les documents economiques, il presente d'autres aspects de la formation de "Le Faisceau".
Notes	西洋史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0509">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0509</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ジョルジュ・ヴァロアにおける生産と管理

——フランス・ファシズムの経済思想序論——

小 城 和 朗

## I はじめに —— 課題と方法

これまで、フランス・ファシズム研究は、一九世紀末以来の右翼諸団体のイデオロギー及び活動の実体的解明を通じて行われてきた。そして、一九三四年二月六日事件の際、右翼諸団体が政権奪取の意図を有していたか否かといった問題に関心が示されてきたように、右翼諸団体の動向の政治的側面に研究が向けられてきた。そのことは、右翼諸団体のイデオロギーについても同様に政治的側面に研究が向けられている。

しかし、筆者は、ファシズムが経済的起源をもっているという認識から、フランス・ファシズム研究を始めたい。第一次大戦後のフランス資本主義の構造変化、とりわけ重化学部門を中心とした独占資本の成立過程のなかで、社会・政治・法律等のレベルにおいて、その形態は一様でないにしてもフランス民主主義体制に内在化したファシズムが現れつつあった。つまり、このような経済・社会の構造変化のなかで、ファシズムを考察するのだから、フランスのような戦間期に体制としては民主主義を維持した国のファシズムを、結局ア・ポステオリに衰退と挫折の歴史としてしか扱うことができないであろう。歴史の流れを切断して、個々のファシヨ的現象を過去の純然たる事象として研究すること自体が、既にフランスのような国においてはファシズムは存在しないことの証明になりかねない。

今日、フランスのような民主主義体制下におけるファシズム研究に求められているのはファシズムが存在したか否かといった証明ではなく、ファシズム研究を通して戦間期の先進資本主義諸国における民主主義体制の実体を問うことではないだろうか。

以上のような視点に立ったうえで、個々の右翼諸団体の動向を考察するならば、それらの団体の性格において、政治的レベルのみでの研究では得られない新たな側面が照らしだされるはずである。事実、本稿で扱うジョルジュ・ヴァロア(Georges Valois 本名 Alfred-Georges Gressent 一八七八—一九四五)の経済的問題提起が、フランスにおいて最初のファシスト運動と言われる「フェノー(Le Faicéau)」運動を始めた動因となっていたのである。しかも、ヴァロアの「アクション・フランセーズ(Action Française)」時代からの実際の活動、即ち「フランス・知能・生産同盟(Confédération de l'Intelligence et de la Production)」<sup>1)</sup>「スレーヌ運動(Le mouvement semaine)」<sup>2)</sup>「エタ・ジェネロー(Etat généraux)」<sup>3)</sup>「フランス職能組合同盟(Union de corporation française)」等の活動は、純政治的レベルで行われているのではなく、生産点に及んで行われていることである。で、最終的に、ヴァロアの基本的構想が経済的諸問題の把握を通じて、国家の支配へヴァロアを向けたのである(「フェノー」運動)。したがって、本稿で主にヴァロアの経済思想、とりわけ生産と管理に関する彼の構想が問題とされるのも、それらが前述の生産点に関わる諸運動と深いつながりをもっていたからである。

そこで、本稿の課題は、ヴァロアの生産と管理の概念を分析することにより、ヴァロアの経済思想のファシヨ的性格を解明することにある。勿論、筆者はヴァロアの思想分析をもって、彼が展開した諸運動の性格規定を行うことを意図してはいない。しかし、とかく「フェノー」運動をシャルル・モラス(Charles Maurras)を中心とした「アクション・フランセーズ」指導部との政治理念をめぐる対立、及び内部抗争から生まれた分派として、或いはイタリア・ファシズムに触発されたヴァロアという行動的エネルギーに溢れた人間の一時の冒険としてのみ捉えることへの反証となることも本稿の

課題としている。

## II 新しい指導者像

元アナルコイサンディカリストであるヴァロアが「アクション・フランセーズ」に参与したのは、作家ポール・ブルジエ (Paul Bourget) の仲介により、自著『これからの人間、権威の哲学 (L'Homme qui vient, philosophie de l'auto-rité)』の出版を通じてであると言われる。<sup>(3)</sup> ヴァロアがこの書物を出版した一九〇六年当時、シャルル・モラスを中心とした「アクション・フランセーズ」指導部は、「フランス黄色組合連合 (Fédération des Jaunes de France)」の指導者ピエール・ビエトリ (Pierre Biétry) との接触にも見られるように、労働者階級への関心を高め、組織を労働者階級にまで拡大しようとしていた時期でもあった。<sup>(4)</sup> それ故、ヴァロアの『これからの人間』のテーマとされるサンディカリズムと君主主義の理念的結合の試みは、<sup>(5)</sup> 当時の「アクション・フランセーズ」の君主制支持への広範な勢力結集の路線と一致していたと言える。

ところで、此の『これからの人間』は一般的には君主制観及び国王像が描かれたものとして扱われているが、<sup>(6)</sup> それはあくまで結論にすぎない。むしろ、ヴァロアが本書のなかで展開したことは、彼の経済的構想であると言うことができる。彼の指導者像とむすびつけられて提起されたこの構想は、以後の彼の思想の展開にとって重要な要因となっているものである。<sup>(7)</sup>

ヴァロアによれば、文明を支えているのは、労働と労働の組織である。ところが、人間は労働を嫌い、最少限の努力 (Le moindre effort) しかしようとせず、その感性は、最も少い疲労と苦痛を求めるものであり、一方、労働の法則は、人間の性向とは反対に、最大限の努力と疲労を必要とするものである。そこで、努力や疲労を惜まない最強の者が、力によって人間を労働の法則に従わせ、結局、人間の救いとなってきた。それ故に、最強の者の支配は、生活ひいては文明の

利益の名において正当化される。最強の者とは、過去においては、家長、貴族、君主などを指していた。<sup>(8)</sup>では、現代における最強の者、つまり指導者とはどうあるべきかをヴァーロアは次のように述べている。

「財産を危険にさらし、努力を敢えてする者。

人間のために、仕事をつくり出す者。

資源の新たな利用を考え出す者。

ある労働に必要な人間を最も良く選ぶことができる者。

人間のエネルギーを最も良く利用することができる者。

行動の時期を最も良く選ぶことができる者。

規律を与え、指揮をする能力のある者。」<sup>(9)</sup> (傍点筆者)

現実には、ヴァーロアは企業家や資本家にこの指導者としての役割を期待している。<sup>(10)</sup>しかし、自己の地位の保全のみを考える寄生的ブルジョアジーに期待していないことは確かである。私は、この指導者像に、労働及び生産を能率的に、そして技術的に組織して、経済的進歩を促すテクノクラートのイメージが既にヴァーロアにあったように考える。<sup>(11)</sup>が、いずれにせよ、このイメージは、第一次大戦後の社会・経済の危機状況から、ヴァーロアに一層強く意識されることは確かである。

さらに、この書物において看過することのできない重要な点がもう一つある。それは、指導者が人間を労働へ促す「強制 (contrainte)」はヴァーロアの歴史観、文明観の鍵であり、また後の経済体系の構築の鍵となっていることである。彼は、民主主義と社会主義を、この「強制」から人々を離れさせようとすることから、社会を無政府状態に導き、破滅させるものとして批判する。<sup>(12)</sup>ヴァーロアは、民主主義社会、社会主義社会とは異なる新たな社会を、この「強制」を必要とするというペシミスティクな人間観から構想しようとしたのである。この「強制」を基礎とした新たな社会の構想は、やがて戦後に「相互牽制 (la contrainte mutuelle)」の制度として理論的に提示されることになる。

### Ⅲ 「プルードン研究会 (Le cercle Proudhon)」

『これからの人間』を「フェソー」運動の理論的出発点とするなら、ヴァーロアが一九一一年一二月一七日シャルル・モラスの主宰の下に開始した「プルードン研究会」は、「フェソー」運動の先駆的運動と言える。

「民主主義は、前世紀の最大の誤謬である。もし、人が生き、労働をし、生産と文化のために社会生活において人間的な最高の保証を得たいなら、文明の道徳的、知的そして物質的資本を保持し、拡大したいなら、民主主義諸制度をどうしても破壊する必要がある。<sup>(13)</sup>」

このような宣言によって始まったこの研究会は、民主主義批判及びその諸制度の破棄を目的とした数人の若いソレル派のサンディカリストと「アクション・フランセーズ」のナショナリストの「合流点」であった。ヴァーロアは「一九世紀のあいだ対立していた二つのフランス的伝統——ナショナリズムと真の社会主義、即ち民主主義に汚されることなくサンディカリズムに代表されていた社会主義——の合流<sup>(14)</sup>」を準備したプルードンとソレルの思想を援用することによって、金権的民主主義を支える近代経済学の原理を打ち砕くとともに、国民的経済学となる新たな経済学を構築しようとした。<sup>(15)</sup>「家族の、職業の、団体の、そしてとりわけ階級の精神<sup>(16)</sup>」という共通の意識をもち集まったサンディカリストとナショナリストたちは、階級闘争という観点をもち込むことなく、国民的利益或いはフランスの秩序という大きな枠組みの中で、それぞれの階級の有り方を考えようとしていた。<sup>(17)</sup>

ところで、この研究会が響感を買ったのは、現社会の批判にプルードンを援用したためである。というのも、カトリックの保守主義者や君主主義者たちは、プルードンが反教権的思想家であると考えていたからである。<sup>(18)</sup>また、プルードンの思想は、一九〇〇年頃最も労働者階級に広まっていたと言われる。<sup>(19)</sup>そこで、サンディカリストの有力紙『ムーヴマン・ソシアリスト (mouvement socialiste)』の主宰者ユベール・ラガルデル (Hubert Lagardelle) プルードン研究家の

セレスタン・ブグレ (Célestin Bouglé) 労働問題研究家のマキシム・ルロア (Maxime Leroy) たちは、左翼でなく、右翼の「アクション・フランセーズ」が研究会を設立したことに憤慨していたと言われる。<sup>(20)</sup>

特にカトリックの保守主義者及び君主主義者たちに向けてであろうが、モラスは早急に『プルドン研究会誌』の創刊号で「プルドンの思想は、我々の思想ではない。」<sup>(21)</sup>と断わっている。モラスのこういった保守主義者や君主主義者たちに対する政治的配慮とは別に、地方分権的君主主義に重きを置き、所謂政治革命によって経済問題を解決するというモラスの「政治第一主義 (politique d'abord)」は、ヴァロアの主張する経済問題の探求を基礎に、社会構造の変革を進めるという問題意識とはもともと異っていたと言うべきであろう。<sup>(22)</sup>しかし当時は、まだヴァロアとモラスの思想的対立は表面に現われることはなかった。モラスは、研究会の指導をヴァロアをはじめ若いサンディカリストたちに委ね、創刊号以後は会誌に寄稿することもなかった。

そこで、ヴァロアによってプルドンとはどのように理解されていたのか。ヴァロアは『何故、我々の仕事をプルドンの精神に結びつけるのか。』という論文で、プルドンがフランス大革命の子であり、革命的信念をもってはいるが、建設を熱望し、組織化され、秩序立ったそして規律ある生活を熱望していた一人の建設者であるとしている。革命の指導的理念に支配されながらもプルドンが『所有の理論』の結論で、自由を確保するためには所有権は正当であり、必要なものとしたこと。そして、革命的情熱に指導され、鼓舞されてはいるが、一七八九年から生れた無政府状態には絶対に反対していることを強調し、プルドンとは永遠のフランスであると言っている。ヴァロアは永遠のフランスの労働者は、労働の伝統ある功績を再現し、また、数世紀を通じて鍛えられた永遠のフランスの知性は、もはや無秩序の形跡しか見えないこの新しい世界に秩序を探し求めるものであるとしている。<sup>(23)</sup>彼は、プルドンが革命的であるが故に、秩序を求めようとしたと理解したのかも知れない。ヴァロアにとって、秩序とは当時は君主制を再興することであったが、革命的とは秩序以上に重要な意味をもっていた。それは、次の矛盾したヴァロアの言明にも窺える。

「我々の運動は、必然的に……君主政体を再興しようとするに於いて反革命的であると同時に、我々に課された外国の秩序を打倒し、フランスの伝統に依拠した諸制度を築こうとするに於いて革命的である。しかし、経済界はかつてフランス国民が築いた古い防衛機構の再建を不可能にするほどに非常に深刻な物的変化を受けた故に、我々が築こうとする諸制度とは新しい形態となる<sup>(24)</sup>。」(傍点筆者)

正に、この革命的なものがヴァロアをはじめ研究会に集まった人々にとって重要な課題であったはずである。彼らは新しい経済構造の探求を基礎として、政治・国家の問題に取り組むのであって、モラスが考えるようにその逆ではなかった。

また、一九三〇年代に、ファシズム運動が高まる中で、ピエール・アンドリュ (Pierre Andren) ドリュ・ラ・ロシエル (Drieu La Rochelle) らは、「プルドン研究会」を「ファシズム一九一三年」として、英雄主義と暴力への賛美に駆られた様々な階級からなる若者たちが、資本主義と議会主義的社會主義の打倒をめざして集まったものとして描いている<sup>(25)</sup>。しかし、このような一九三〇年代のファシヨ的心情に駆られた文学者たちの「ファシズム的雰囲気」とのアナロジ<sup>(26)</sup>、また、ただ現存の社會秩序を打倒しようとしたというネガティブな印象とは別に、この研究会の当時の社會秩序の破壊と同時に社會改革への積極的姿勢を見落してはならないと考へる。

やがて、この研究会は、第一次大戦を迎え、一九一四年に解散し、またこの会のリーダー格のアンリ・ラグランジュ (Henri Lagrange) の戦死などにより以後の企では立消えになる。いずれにせよ、後にヴァロアが回想しているように、この研究会を「フランスにおける最初のファシスト的企<sup>(26)</sup>」として、ヴァロアに伝統的右翼運動の枠を越えて新たな運動の場を形成する可能性を与えたことは確かである。

#### IV 戦後ヴァロアの思想展開 — 『新經濟論』

ヴァロアは三六歳のとき第一次大戦に出征し、ほぼ三年間を前線と野戦病院で送った。そして、戦後ヴァロアは大戦の



教訓を基に、新しい経済組織のプランを発表するなど、この時期はヴァロアにとって最初の思想的転換期であった。

一方、ヴァロアの属するアクション・フランセーズもまた、大戦とその勝利、そして戦後のナシヨナリスティックな世論の高まりによって昂揚期を迎えていた。だが、アクション・フランセーズが巧みにジャーナリズムを操り、反議会主義的な主張を世論に訴えたり、政敵に人身攻撃を加えたりすることは、<sup>(27)</sup>ヴァロアにとっては二次的な問題であった。ヴァロアにとって最大の問題は、大戦による約一五〇万人の人的損害、北部工業地帯のドイツ軍による破壊といった物的損害を蒙ったフランスをいかに再建するかであった。<sup>(28)</sup>

この戦後の危機<sup>(29)</sup>をヴァロアは、軍隊生活の体験から学んだ社会的連帯と、生産の新たな組織によって克服することを構想していた。

「軍隊の下でつくり出されたこの見事な統一を思い抱くなら、仕事は簡単である。」<sup>(30)</sup>

様々なイデオロギー、あらゆる職業を持った人々が、イデオロギーの相違や利害を離れ、一致して敵の脅威に、そして勝利のため立ち向かっていった精神のみが、つまり軍隊での連帯を社会的連帯に転換することによってフランスを再建できるとする。しかし、ヴァロアの意味する社会的連帯とは、当時カトリックの経済学者たちが「社会スemaine (semaines sociales)」運動で示した階級協調<sup>(31)</sup>を意味するものではない。

そこで、新経済組織の主体としての社会的連帯についてのヴァロアの見解を明らかにする必要がある。まず、ヴァロアの社会的連帯とは、彼の階級観に繋がる問題であった。

ヴァロアは、「社会諸階級 (Les classes sociales)」を現実存在するものとして、「経済諸階級 (Les classes économiques)」を想像上のものとしている。つまり、ヴァロアは、階級を経済的な区分としてではなく、社会的な区分として<sup>(32)</sup>考え、一つの労働者階級 (une classe ouvrière) は存在しない。存在するのは、労働諸階級 (des classes ouvrières)、農民諸階級 (des classes rurales) としてブルジョア諸階級 (des classes bourgeoises) であって、それらは経済的

階級ではない。それは、同じ労働者と言われる人々がいても、彼らの属する生産部門がそれぞれ違えば、彼らの利害も違ってくる。ヴァロアは考えたのである。また、同じ生産部門内においても、諸個人の生産における役割が多様化しているため、経済的階級観によって諸個人を編成することができないとヴァロアは考えている。生産においては、諸々の労働者、現場監督、職長、事務職員、技師、課長、部長、取締役、雇主といった人々がいる。それぞれが、固有の、同じような、敵対する、あるいは共通の利害を有して存在している。彼らの利益は、生産における各々の機能に相応している。したがって彼らの利益は、各々の機能によって決定される生産者の利益であって、階級の利益ではないとする。<sup>(33)</sup>

ここでヴァロアは明らかに階級概念を彼の生産における社会的機能という表象をもって置きかえ、階級概念そのものを払拭しているのである。したがって、たとえ彼が「社会的諸階級」という言葉を用いているにしても、「階級」そのものは何らの意味ももってはいない。むしろ、彼の視野の中にあるのは、生産における社会的機能によって区分された諸グループなのである。結局、経済において存在するのは、諸階級ではなく、実際に活動している生産者の諸グループであって、それらのグループを組織することが社会的連帯を意味する。

そして、ヴァロアは、社会的連帯のための生産者の諸グループの組織構想を、彼のコルポラティズムの理論によって体系化していく。ヴァロアのコルポラティズムの理論を簡単に説明すれば、先ず生産部門ごとに垂直的に、そして生産者の生産における機能に応じて、それぞれの生産者を組織していく。例えば、ヴァロアは、生産を二五の部門に分け（1食用・飼料及び産業用植物栽培、2ブドウ栽培、3飼育、4林業、5園芸、6農産物加工と食品業、7繊維工業、8繊維の加工と衣服、9皮革、10炭坑・採石業、11土木工事・建築、12大冶金工業、13鍋釜類製造・鑄造・小冶金工業、14機械・電気組立て、15自動車・自動車・飛行機、16水力・電気・照明、17光学・精密機具、18化学・製陶・ガラス工業、19紙・書籍・グラフィック・アート、20宝石・細工・時計、21芸術品・パリ製小間物、22商船・漁船・港、23鉄道・国内航行、24旅行業・ホテル業、25銀行・保険業<sup>(34)</sup>）、それらを地域的、地方的、全国的に段階的に組織しようとした。

段階的組織の方法を詳しく説明すれば、先ず、それぞれの産業で、雇業者、技術者、労働者等が組合を形成し、その代表を職業評議会に送る。地域連合は、それぞれの地域で職業評議会の代表を集める。次に全国連合は地域連合の代表を集め、さらにその代表を国民経済評議会に送る。国民経済評議会は四組織の頂点に位置する。そこで、国家は各々四組織の自治を保証する。四組織内のそれぞれの生産者のグループの対立は正常なことであって、必要なことである。国家の自治の保証により外部から圧力や介入を免れたそれぞれの生産者のグループは、内的対立を技術的進歩に向け、それは結局、生産の発展を促すとした。<sup>(36)</sup>つまり、技術的進歩や生産の発展は、生産者たちの協調ではなく、対立によってもたらされるとヴァロアは考えたのである。<sup>(35)</sup>

また、元来、フランスのコルポラティスムの理論家たちは、イタリアやスペインの理論家と比べ、諸々のコルポラシオンの自治及び地方分権化に、より大きなウエイトを置いていると言われる。<sup>(37)</sup>その点、ヴァロアのコルポラティスムの理論も例外ではない。しかし、ヴァロアにおいては、自治や地方分権化は強力な国家の仲裁や保証が前提となる。そして、議会制民主主義における国家は、仲裁や保証の機能を果しえないとして、ヴァロアは経済組織の問題から国家の問題（「国家改造 *réforme de l'Etat*」）へ関心を移して行く。この国家改造を目的とした運動が、一九二二年に開始される「エタ・ジエネロー」の運動である。この運動こそ実際のファシズム運動の始まりと言えよう。

コルポラティスムによる生産者の諸グループの組織をもとに、新しい経済制度としてヴァロアが提示したのが「相互牽制」の制度である。「相互牽制」の制度の下では、従来の自由主義経済や社会主義経済における価値 (*valeur*) と生産 (*production*) の理論は否定される。つまり、ヴァロアの経済学においては、自由主義経済の需給の法則もマルクスの剰余価値の理論も適用されない。

ヴァロアは、近代経済学が依拠し、展開した理論は、価値の主観的、理念であるとし、それに対して価値は客観的、理念であると主張する。人間が価値をつくり出すのではなく、人間は価値をただ認めるにすぎないとする。<sup>(38)</sup>ヴァロアにおける価

値の客観性とは、人間生活の維持及び発展にもたらされる貢献に依りて価値が評価される。価値は、性質を異にしはするが分つことのできない二つの行為の後、はじめて交換の対象となる。即ち、第一に、所有に先行し、所有に伴う安全の確立（＝本質的には政治的行為である）第二に、所有された土地の使用を組織化するためになされた労働と人間が使用する動物、木材、岩石などを自然界から取り出すためになされた労働（＝経済的行為である）とである。ヴァロアは特に、経済的行為は、安全の確立ののちにはじめて可能であるため、安全の確立＝治安を第一に据えなければならぬとする。<sup>(39)</sup>

そこで、ヴァロアは、自由主義経済の価値の主観的理念は、人間心理を通してしか価値を考えなかったことにあり、それが経済的無秩序を生んだとする。テュルゴからポール・ルロア＝ポリウまでに至る経済学者たちは、物が、我々の享や我々の欲望の充足にどれだけ相応するかによって価値づけられるとした。そして、以後の経済学者たちも、価値の理念を有用性の理念に結びつけ、有用性の理念を人間の欲求の評価に還元することによって、今日まで価値の主観的理念が存続したとする。価値が人間の欲望の上に依拠したとき、人間の欲望に対していかなる拘束も与えられなくなり、結局、価値の主観的理念の上には、いかなる社会的、国民的制度も築くことができない。所有以外は、人間にいかなる社会的責任やいかなる社会的義務も与えられなくなると考えている。<sup>(40)</sup>

次に、ヴァロアは、社会主義経済に対しては、自己の生産の概念によってマルクスを批判の対象に据える。ヴァロアによれば、マルクスにとって、価値は生産に組込まれた労働に存する。剰余価値を、資本家が不当に横取りするとする。マルクスの考えは、マルクスに質（qualité）的観念が欠落して、マルクスが量（quantité）的観念でしか労働を考えなかったとする。マルクスの量的観念においては、労働時間が、自然的な与件（土地の豊さ、鉱物資源の豊さなど）、技術的完成、労働力の拡大などによって条件づけられる。マルクスが、労働時間を変える生産の諸要因として、労働の再分割、機械の使用、作業工程の改善、化学・自然作用の応用、新しい通信と新しい交通手段による時間と空間の短縮などをあげていることに対して、ヴァロアは、次の「我々にとって黄金律となる」<sup>(41)</sup>ものをマルクスは無視しているとする。即

ち、労働時間は、①企業の基本的組織、②労働の構想、即ち労働の知的組織、労働に与えられた作業の組合せ、原料の使用  
方法、③指揮によって変化するというのである。<sup>(42)</sup>

以上のように、ヴァロアは、生産における質的要因を重視することによって、生産の諸要因はマルクスが考えていたよりも複雑であると考えた。しかもヴァロアは、当時、企業におけるテイラー主義化(taylorisation)によって、経済現象に最も通じていない人々にも生産における労働の知的組織の大きな役割が明らかになっていると指摘する。<sup>(43)</sup>

そこで、これらの諸要因を生産においていかに合理的に機能させるかがヴァロアの次の課題となる。ヴァロアは、生産は、労働と資本の結合した働きの結果でも、知識・資本・労働の三つの働きの結果でも、技術と労働の二つの働きの結果でもない考え、次の六つの諸要因、即ち①構想(conception) ②指揮(commandement) ③個人的利益(intérêt personnel) ④技術(technique) ⑤労働(main-d'oeuvre) ⑥資本(capital)の階層化された協力関係(collaboration hiérarchisée)の結果であるとした。①は資本家或いは技術者などがその役割を担うとされる。ここでは労働力の活用・実施方法そして効率が考えられる。②は①の構想を実施し、しかもその実施のために労働及び技術を管理・調整する機関である。③の個人的利益は①と②の指導者のためのものである。それは、彼らの活動に絶対に必要な動機となるものである。最後に⑥として資本が据えられているのは、資本は経済的創造において、貸借され、使用されるにすぎないので受動的役割でしかないからであるとしている。<sup>(44)</sup> ヴァロアにとって、生産の諸要因のなかで最も重要な要素は資本でも労働でもなく構想であった。これが彼の「新経済論」の骨子ともいえる生産の概念である。また、構想を抱き、推進していく者は、資本家とプロレタリアの間に現われた新しい階級としての生産の技術者の階級であったはずだ。<sup>(45)</sup>

ところで、フランスでは既に第一次大戦前から一九〇八年にルノー社がアメリカのテイラー・システムを実験的に導入したように、経営の科学的管理、労働の科学的組織に一部の先端部門に属する企業家は特に関心を示していた。そういった関心は、第一次大戦後の経済の復興及び生産力の増大の要請のもとに、一般的となる。それは、戦時中の協調体制の経

験、戦力増強のための労働と生産の合理化の推進による社会・経済システムの発展に助けられた。大戦直後、労働界においても、A・トーマ、CGTの指導者L・ジュオーなどに代表される改良派は、労使協調路線をめざし、生産の発展・経済の近代化による社会問題の解決をはかるという方向にあった。<sup>(46)</sup> また、技術革新の推進の必要は、一九一九年七月二五日のアスチエ法の成立により国家による技術者養成が定められた。<sup>(47)</sup>

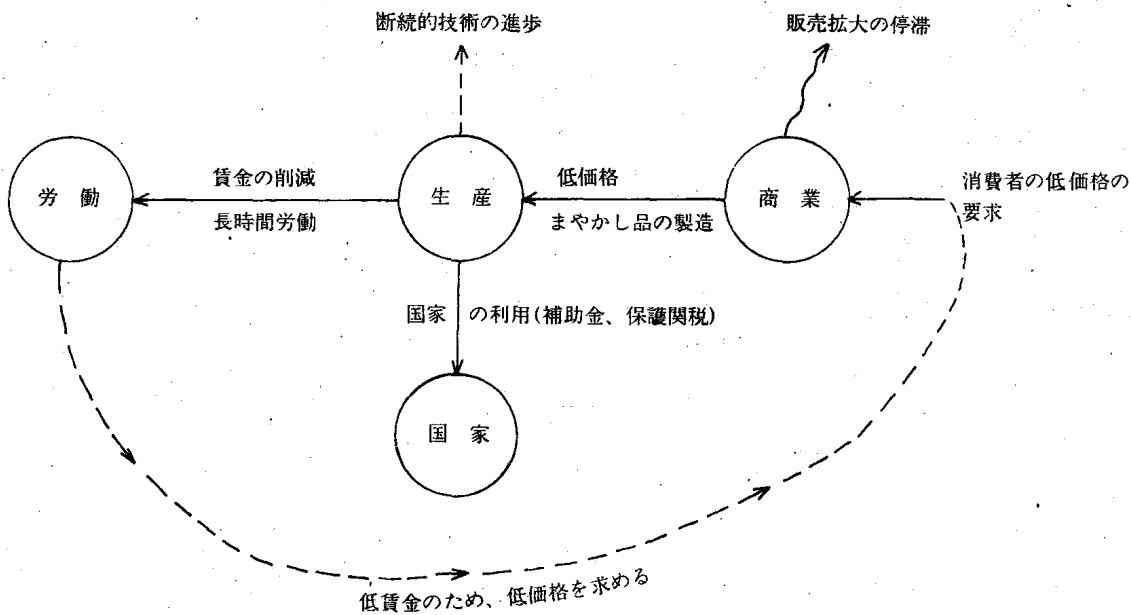
そこで、ヴァロアの生産における構想や管理の重視、そしてこれから紹介する「相互牽制の制度」においても技術的進歩と生産の効率化を促すことが目的とされていることから、当時の労働と生産の合理化運動及び技術革新の推進の趨勢を反映しているといえよう。

それでは、「相互牽制」の制度の下で、いかなる経済活動が行われるかを見ておきたい。先ずヴァロアは「この制度においては、売買し、生産し、労働するために全てのものが組合サディカに組織される。あらゆるものの価格、労働とその報酬の諸条件、そして生産の諸条件は、利害関係のある組合間の協定によって調整される。」<sup>(48)</sup>と要約している。それをヴァロアは次のように図式化する。

図のI II IIIは、Iを自由競争の経済制度の、IIを強力な労働組合を有する当時の経済制度の、そしてIIIを「相互牽制」の経済制度のヴァロアによる図式化である。

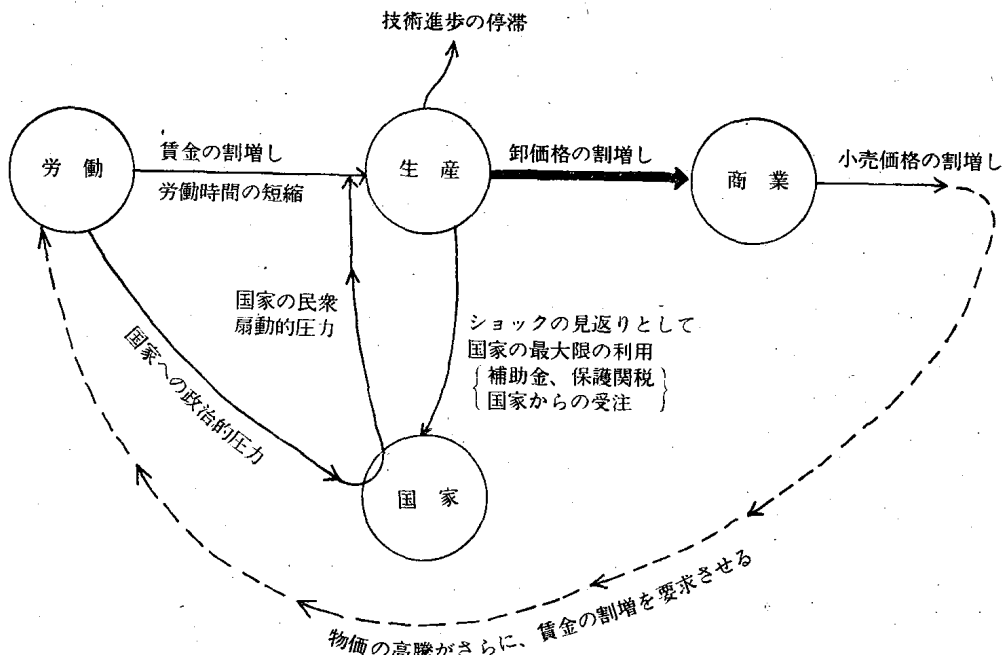
Iは、消費者の「最少限の努力」(Le moindre effort)の傾向が、低価格の追求によって現われることを特徴としている。このような傾向は商業に圧力をかけ、それが直接に生産に影響を与える。それは、生産の労働への賃金の削減と労働時間の延長という圧力にかわる。この圧力を受けた労働は、さらに低価格を求め、それが商業に安物売りを、生産に粗悪品の製造を促す。

IIは「我々が受けている制度」である。ここで現れる傾向は、「最少限の努力」のそれではなく、最大の享受或いは最大の利益を求める傾向である。この傾向は消費者側からでなく労働側から発する。生産がこの傾向を受け、そして商業に



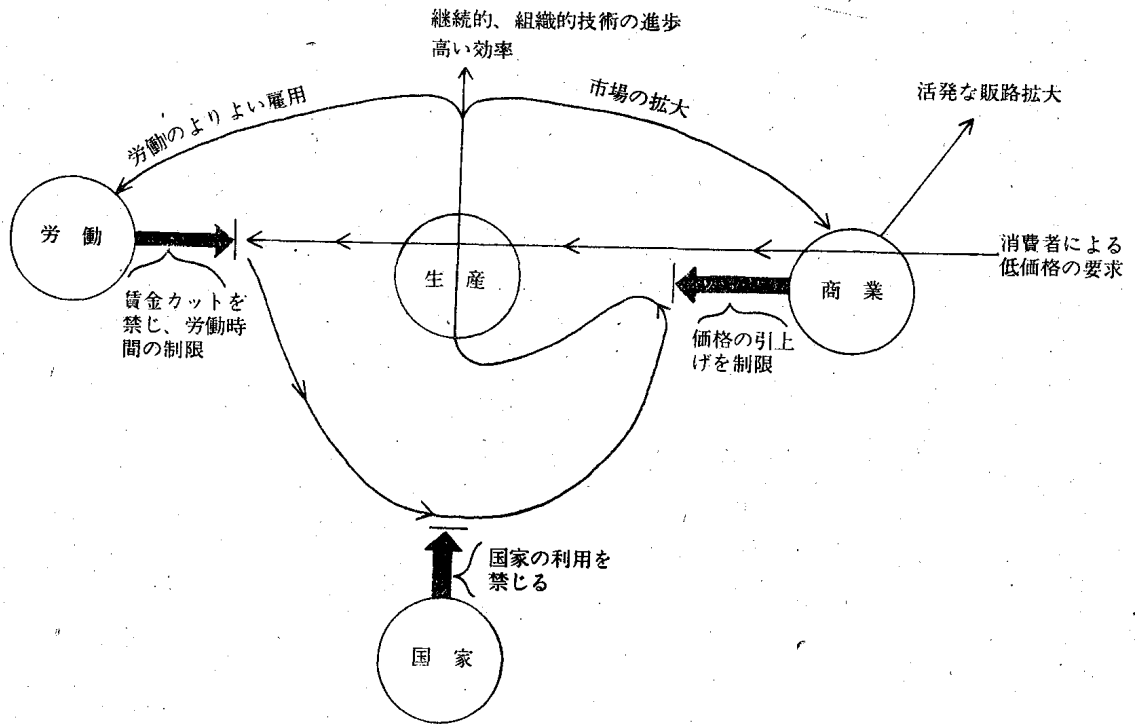
I. 自由競争の制度 (Régime de la libre concurrence)

出典) G. Valois, *L'Economie nouvelle.*, p. 200.



II. 一方的組合制度 (Régime syndical unilatéral)

出典) *ibid*, p. 200.



### Ⅲ. 相互牽制の制度 (Régime de la contrainte mutuelle)

出典) *ibid.*, p. 200.

それを受入れさせる。ストライキが行われるなかで、それを有益な指導に導く機関が全くないので、この傾向はとりわけ販売価格の割増しとなる。労働は、物価の上昇により、さらに賃金の割増しを要求する。そして、それはさらに消費材の価格の上昇を惹起する。

Ⅲはヴァロアが提唱する制度である。図の太い矢印は牽制の方向を示すもので、例えば、商人の組合は、消費者と接触し、その圧力を受けることによってより低い価格を実現するために、生産者に圧力をかける。技術と労働『それぞれの組合は、より高い報酬を得るため、生産者の諸組合に圧力をかける。双方から圧力をかけられた生産者の諸組合は、これらの圧力を免れる唯一の道は技術的進歩の道で、それは収益の増大とより低い価格をもたらすことになる。一方、生産者の諸組合は、技術と労働の組合に対して、よりよい仕事の効率を求めるため圧力を加える。そして、商人の諸組合に対しては、新しい、より拡大した商品の販路を求めるように圧力を加える。それぞれの組合内では、規律、集団的規則そして組合の協定を尊重させるため、メンバーが互いに牽制し合う。そういった組合での牽



制の一般的効果は、自動的に労働と技術の諸グループにおける職能的価値の向上、事業の拡大と改善、商業活動の発展に方向づけられると考えている。<sup>(49)</sup>

以上、第一に、少い労働力で生産性を高めること。第二に、労働時間を縮少し、労働者の賃金を上げながら物価の上昇を抑えること。これら二つの経済問題に対して掲げた解決の構想としてのヴァロアの『新経済論』を紹介した。第一の問題について、ヴァロアは、当時多くの企業家たちを引き付けていたテイラー主義を一企業内での労働の合理化がその企業の生産性を拡大するものとして一応評価する。一方、ヴァロアは、一企業内のレベルでの労働の合理化だけでなく、全体的生産の合理化 (*la méthodisation de la production*) を実現しなければならないとする。これら二つの合理化を推進することを彼は『新経済論』のテーマとした。<sup>(50)</sup> 第二の問題で、特に注目したいのは、当時CGT内でも議題にあがっていたといわれるが、労働者に対する賃金である。労働者に対する賃金は単に日給や月給として支払われる直接賃金だけでなく、労働者及びその家族へ、疾病・死・失業に対して保証を与える賃金体系をつくらねばならないとしている。そのためコルポラティズムの組織において、協調組合基金 (*les caisses corporatives*) を設けることを示唆している。<sup>(51)</sup> この基金は、生産者たちの労働によって賄われ、指導者と労働者の代表によって管理されることになる。

## V おわりに

以上の如く、第一次大戦前から一九二〇年代初葉にかけて、ヴァロアの生産と管理の概念を分析してきた。ヴァロアの経済思想は、フランスの産業近代化の流れのなかで捉えなければならない。「フェソー」運動期のみを扱えば、その運動の政治性に重きを置くことで、その産業近代化志向の側面は看過されやすいが、<sup>(52)</sup> 例えば一九二六年七月一五日付けの『新世紀 (*Le Nouveau Siècle*)』紙上で発表した「フェソー」運動の綱領にも、即ち「ヴェルダン綱領 (*Programme de Verdun*)」の「正義と国民的利益に従い、企業家と労働者が結集するコルポラシオンの協力をもって、生産を組織せよ。

繁栄を実現するため、統一国家によって、フランスの全勢力を整合せよ。<sup>(53)</sup>（傍点筆者）という宣言は正に「アクション・フランセーズ」時代に表明してきたヴァロアの思想の集約を見ることができるといえる。また、一九二七年に発表した著書『ファシズム』で、彼は、一七八九年のフランス大革命以来の「近代国家」建設の事業を受け継ぐ運動としてファシズム（『フェソー』運動）を位置づけている。<sup>(54)</sup>そして、一九世紀にはサン＝シモンの思想が、鉄道、道路、運河、工場などの建設者の大グループを指導してきたのに対し、二〇世紀には、電気時代の運命を握ることになる新しいグループの形成と活動をソレルの思想が、指導することになる。ソレルの思想が正にファシズムの仕事<sup>(55)</sup>を担う。

ヴァロアを政治活動、即ちファシズム運動に向させたのは、彼の経済思想の実践として「フランス・知能・生産同盟」、「スレーヌ運動」、「エタ・ジェネロー」、「フランス職能組合同盟」等の運動を進めるうえで、前述の綱領の文にもあるように「統一国家」、つまり国家の改造が最終的目標となったからである。しかし、ヴァロアにとって国家の改造の達成は、政治革命によるよりも、生産点に立脚した経済革命によるものだった。それは、「フェソー」運動の組織の主体を諸々のコルポラションとしていることから明らかである。これらのコルポラションが、将来自由主義経済や階級闘争のサンディカリズムに全面的に対立する経済・社会組織の中核となるのであった。<sup>(56)</sup>

結局、ヴァロアの経済的構想は、様々な点で多くの欠陥を免れることができず、しかもその経済的実現可能性を疑わざるをえないものの、実際は第一次大戦後の生産力の拡大が求められるなかで、ある一定の現実的プランとしてフランスにその受容の可能性があったにちがいない。しかし、彼の構想が、その支持者にどのように受けとられていたかは、「フェソー」運動の実体を解明しなにかぎり明らかではない。そしてその解明が筆者の次の課題となる。<sup>(57)</sup>

最後に、「フェソー」運動の挫折後、ヴァロアの国家の改造のため、雇用者と労働者の全てが連合に組織されて金権政治<sup>フルクシャイ</sup>を追放するという提案は新しい国家の概念として一九二九年の『国際経済誌』で取りあげられている。<sup>(58)</sup>また、ヴァロアの「カイエ・ブルー」誌や、彼の出版社「ヴァロア書房 (Librairie Valois)」で出版される社会、経済的著作、例えばベ

ルトラン・ド・ジュエーヴネル (Berrand de Jouvenel) の『統制経済論 (L'économie dirigée)』 シャルル・アルベール (Charles Albert) の『近代国家論 (L'Etat moderne)』 マルセル・デア (Marcel Déat) の『社会主義の展望 (Perspectives Socialistes)』等は一九三〇年代の世代に社会<sup>(82)</sup> 経済的教育を施したと言われる。

註

- (1) このような見解として特に田中治男「ファシズム期におけるフランスの右翼——Ch. モーラスとアクション・フランセーズを中心に——」(東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会』7東京大学出版会、一九七九年)。他に木下半治『フランスナショナリズム史』(1)(図書刊行会、一九七六年)。
- R. Rémond *La Droite en France*, 1971; P. Milza, *L'Italie Fasciste devant l'opinion Française*, 1967.
- (2) ヴァロアとアナーキストやサンディカリストたちとの知的交流については、特に G. Valois, *D'un siècle à l'autre*, 1924, pp. 97-153 を参照。ヴァロアは本書の中で「私は一八九七年から一九〇〇年までまる四年間というものは無政府主義の世界で暮した。」(一〇三頁)と述べ、Charles-Albert, Paul Delesalle, Fernand Pelloutier, Jean Grave, Augustin, Hamon といった人々の名を挙げている。また、ヴァロアは出版社アルマン・コラン (Armand Colin) では組合の書記として活動したサンディカリストでもあったと言われる。
- (3) G. Valois, *Basile ou la Politique de la Calomnie*, 1927, P. X.
- (4) E. Weber, *Action Française*, 1962, pp. 68-70; Z. Sternhelle, *La Droite révolutionnaire*, 1978, p. 267. なお、一九〇二年四月一日にピエール・ユヘトリによって創設された黄色組合運動については、G. Moss, *The French Right and the Working Classes: Les Jaunes*, *Journal of Contemporary History*, 7, 1972, pp. 185-208; Z. Sternhelle, *op. cit.*, pp. 245-317. を参照のこと。
- (5) J. J. Roth, *Revolution and Morale in Modern French Thought: Sorel and the Sorelians*, *French Historical Studies*, III, Fall, 1963, p. 210.
- (6) 田中、前掲論文、二七九、二八〇頁。
- (7) ヴァロアは『これからの人間』の一九二三年度版の序文で『新経済論 (L'Economie nouvelle)』の学説は「……二〇年前『これからの人間』にあつたわづかばかりの真理に助けられておこなつた諸問題の分析にすぎないし、また一体系の構築にすぎない。」(G. Valois, *Homme qui vient*, 1923, p. 15) と述べている。なお、『これからの人間』を筆者のように経済的観点から扱ってはいないが、同様に本書が一九二〇年代のヴァロアのファシズム理論の基礎として、ヴァロアの指導者像は彼の国王像とは関係なうものとして示してゐるのが、C. D. Tin-gley, *Georges Valois and the Faisceau: Apocalyptic*

- politics in twentieth-century France, *Proceeding of the 4th annual meeting of the Western Society of French History*, 1976-1977, pp. 383-384. 邦訳あり。
- (80) Cf. G. Valois, *op. cit.*, pp. 41-42.
- (81) Cf. G. Valois, *op. cit.*, p. 69.
- (82) Cf. G. Valois, *op. cit.*, pp. 94-100.
- (83) Cf. G. Valois, *op. cit.*, p. 69.
- (84) Cf. G. Valois, *op. cit.*, pp. 31-45, pp. 70-71.
- (85) Déclaration, *Cahiers du Cercle Proudhon*, janvier-février, 1912, p. 1. 本邦研究会の発起人たちの名を記す。Jean Darville (本名 Edouard Berth) Henri Lagrange, Gilbert Maire, René de Marans, André Pascalon, Marius Piquier, Georges Valois, Albert Vincent 等(邦訳あり) (Déclaration, *ibid.*, p. 2.)°
- (86) G. Valois, "Sorel et l'architecture sociale", in *Cahiers du Cercle Proudhon*, mai-août, 1912, pp. 111-112.
- (87) *ibid.*, p. 111.
- (88) G. Valois, "Pourquoi nous rattachons nos travaux à l'esprit proudhonien", in *Cahiers du Cercle Proudhon*, janvier-février, 1912, p. 35.
- (89) *ibid.*, pp. 35-37.
- (90) Cf. Y. Guchet, *Georges Valois*, 1975, p. 81; P. Mazgaj, *The Action Française and Revolutionary Syndicalism*, 1979, pp. 191-192.
- (91) J. Touchard, *La Gauche en France depuis 1900*, p. 36.
- (92) Cf. Y. Guchet, *op. cit.*, p. 81; G. Valois, *D'un siècle à l'autre*, pp. 258-259. 本邦「プロメーテウス神話」の邦訳を「オネン」マロト・オネン・ダガン (Henri Dagan) 'プロメテウス (Marc Sangnier)' ショマン・キマニエム (Georges Guy-Grand) などと訳して特別ジャンロトを「オネン」(in *Cahiers du Cercle Proudhon*, mai-août 1912, pp. 150-169.)°
- (93) Ch. Maurras, 'À Besançon,' in *Cahiers du Cercle Proudhon*, janvier-février, 1912, p. 3.
- (94) Th. Maulnier, *Les Essais*, Charles Maurras et le socialisme, *La Revue universelle*, vol. 68, n. 19, janvier, 1937, pp. 168-169.
- (95) G. Valois, "Pourquoi nous rattachons nos travaux à l'esprit proudhonien", p. 39.
- (96) *ibid.* p. 42.
- (97) Cf. Andreu, *Fascisme 1913, Combat*, février 1936; M. Winock, *Une parabole fasciste: Gilles de Drieu La Rochelle, Le Mouvement social*, n°80, juillet-septembre, 1972, p. 29.
- (98) G. Valois, *Basile ou La Politique de la Calomnie*, p. XIII.
- (99) 第一次大戦中「アキンオン・フランチャーズは」「神聖同盟 (Union sacrée)」に加盟し、国家の問題の前にその体質を

徐々に保守化させ、以後一層社会秩序を重んじるようになった。「アクション・フランセーズは一九一八年から一九二六年一二月のローマ教皇ピウス一世による運動否認までのあいだ昂揚期を迎えている。大戦中、「アクション・フランセーズ」は以前からジョルジュ・クレマンソーに非難を浴びせていたにもかかわらず彼の政権への到達を支持し、また平和主義、敗北主義の風潮が漂っていた第五次リボ内閣（一九一七年三月二〇日〜一九一七年十一月三日）の期間中、無政府主義者ミゲル・アルムリイダ（別名ヴィゴ）の主宰する『ル・ボネ・ルージュ』（*Le Bonnet Rouge*）紙、急進社会党議員でリボ内閣の内務大臣ジャン・ルイ・マルヴィイ、同じく急進社会党員ジョゼフ・カイヨールの敗北主義とスパイ行為を摘発し、特にレオン・ドレードが中心となって彼らに激しい攻撃を『ラクシオン・フランセーズ（*L'Action Française*）』紙で行っていた（E. Weber, *Action Française*, pp. 88-112; Léon Daudet, *Souveneur politique*, 1974, pp. 88-93）。やがてドレードの辛辣な筆は、ヴィゴ、カイヨールの逮捕と投獄を、マルヴィイの最高裁への訴追と内務大臣免職の処置を政府にとらせた。ドレードは第二次クレマンソー内閣の時代（一九一七年二月一六日〜一九二〇年一月一八日）、一九一九年五月一六日から三〇日の総選挙、所謂「ブロック・ナショナル（*Bloc national*）」での右派の勝利で、初めてパリ第一六区の議員に当選し、地方においても「アクション・フランセーズ」の議員が数人誕生したと言われる（E. Weber, *op. cit.*, pp. 124-135）。一九二二年には、ポア

ンカレの財政政策、対独強硬政策を支持して、「アクション・フランセーズ」運動は、その反議会主義的性格にもかかわらず、運動を深くフランスの保守的政治に統合させていた（E. Weber, *op. cit.*, pp. 136-163）。

(28) G. Valois, *D'un siècle a l'autre*, p. 284.

(29) 戦後の危機意識は、カトリックの経済学者たちも共有していた。戦後の経済危機を生産様式の深刻な混乱——大戦による莫大な資源の浪費、国際的経済闘争から生じた無政府状態、価格の不安定——から惹起されたもので、それらは生産者のモラルの危機にも及んでいるとする。一九二〇年に開始された「社会スレーヌ（*semaines sociales*）」運動は、階級協調を基礎に生産の危機を克服する運動である（Cf. Yves-Claude Leguin, *L'Eglise catholique et les luttes de classes en France en 1920, Cahiers d'histoire de P. M. F.*, n°20-21, 1977, pp. 47-67）。

(30) G. Valois, *op. cit.*, pp. 284-285.

(31) (29) の注を参照。

(32) Cf. G. Valois, *op. cit.*, p. 258, pp. 285-286.

(33) Cf. G. Valois, *L'Economie nouvelle*, 1924, p. 244.

(34) *Action Française*, 29, mars 1920, cité par Y. Guichet, *op. cit.*, p. 99.

(35) G. Valois, *op. cit.*, p. 395-438; G. Pirou, *Les Doctrines économiques en France depuis 1870*, 1925, pp. 190-195; J. Levey, Georges Valois and the Faisceau: The

Making and Breaking of a Fascist, *French Historical Studies*, vol. VII, n°2, Fall, 1973, pp. 282-283; Y. Guchet, *op. cit.*, p. 99.

(36) イタリアにおいても、ソレルの影響を受けたロッシニー、ピアンキ、デ・アンブリス、ファリナッチらのようなサンディカリストが多数、ファシスト党に加盟し、所謂ファシスト組合を形成した。桐生氏によれば、ファシスト・サンディカリズムは「理念的には資本家、労働者、技術者を生産者という概念でひっきり、階級を止揚する」という点、また「生産による国民的富の増大を第一義におき、……生産を阻害する階級闘争を否定」する点は、ヴァロアの「コルポラティスム」の理念と一致する。しかし、ヴァロアの階級協定の捉え方は本文で示したように異なる。またヴァロアは、国民的富の増大についても、その計画性を重視している。イタリアについては桐生尚武「ファシスト組合について——その運動史的変遷をめぐって」(『イタリア学会誌』一九七六年三月)を参照。

(37) M. H. Elbow, *French corporative theory, 1789-1943*, 1966, p. 11.

(38) G. Valois, *op. cit.*, p. 28.

(39) Cf. G. Valois, *op. cit.*, pp. 36-37.

(40) Cf. G. Valois, *op. cit.*, pp. 124-126.

(41) Cf. Valois, *op. cit.*, p. 152.

(42) Cf. G. Valois, *op. cit.*, pp. 152-153.

(43) Cf. G. Valois, *op. cit.*, p. 153.

ジョルジュ・ヴァロアにおける生産と管理

(44) Cf. G. Valois, *op. cit.*, p. 185-187.

(45) 戦後フランス資本主義は新型重化学工業を中心とした独占資本の発展、農業国から工業国への転換、それに伴う都市への人口の集中などによって、技師やサラリーマンに代表される新中間層が増大した。「フェソー」運動においても、その支持者の多くはこれら新中間層を代表する人々で、特に技師 (*ingénieurs*)、技術者 (*techniciens*) たちである (Cf. Z. Sternhell, *Anatomie d'un mouvement fasciste en France: Le Faisceau de Georges Valois, Revue française de Science politique*, vol. 26, février, 1976, pp. 33-36)。しかし、「フェソー」運動当時も、またその以前においても、ヴァロアは特に技術者たちに指導者として役割を期待していたわけではなかったようだ。運動当時、ヴァロアは「全ての能力ある者に開かれた道」をモットーに、社会のあらゆる階級から指導者となるべき人間を選ぶことを示唆している (Cf. G. Valois, *Le Fascisme*, 1927, pp. 40-41)。また、運動以前に、一九一九年六月、ロジェ・フランク (Roger Francq) によって創設された「工・商・農・技術者組連合 (Union syndicale des techniciens de l'Industrie, du Commerce, et de l'Agriculture」通称 *Ustrica*) を技術と労働の協同による生産の組織をめぐるものと理解し、ヴァロアは、自らの生産における六つの活動要因の観点からそれを批判し、またユスティカは、技術と労働の結合による生産のソヴェィエト化をめぐるものとして、そのCGTへの影響を懸念している (G. Valois, *la technique*

et la main-d'œuvre, in *L'Action Française*, 12 janvier 1920)。だが、「フエンー」運動挫折後、ヴァロアは現代を技術者の時代として、生産における指導的役割を技術者に求めつつ (G. Valois, Appel aux techniciens, in *Cahiers bleus*, 20 avril, 1929)。なおこの『カイエ・ブルー』誌の創刊では、Roger Franco, Jean Luchaire, Pierre Dominique, Pierre Mendes-France, André Fourgeaux, Sammy Beracha, Bertrand de Jouvenel, Paul Marion などが参加している。

(49) 近年、テクノクラシー及びテクノクラートの運動に関する研究が盛んになりつつあるが、特に次に掲げる文献は、フランス・ファシズムの近代化的側面を考える場合、有益な示唆を筆者に与えた。Ch. S. Maier, *Between Taylorism and technocracy: European ideologies and the vision of industrial productivity in the 1920s*, *Journal of Contemporary History*, vol. 15, 1970; R. F. Kuissel, *Technocrats and Public Economic Policy*, *Journal of European Economic History*, spring, 1973. 特にフランス・ファシズムと近代化の問題を取り扱った論文として、K.-J. Müller, *French Fascism and Modernization*, *Journal of Contemporary History*, vol. 11, 1976 や、また労働運動の転換の問題について M. Leroy, *Les Techniques nouvelles du syndicalisme*, 1924 M. Fine, *Toward corporatism: the movement capital-labor collaboration*, Ph. D. diss., Univ. of Wisconsin, 1971; M. Fine, Albert Thomas: A Reformer's

vision of Modernization 1914-32, *Journal of Contemporary History*, vol. 12, 1977. など。

(47) Cf. A. Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967*, 1968, pp. 372-375.

(48) G. Valois, *L'Economie nouvelle*, p. 198.

(49) Cf. *ibid.*, pp. 198-201.

(50) Cf. *ibid.*, pp. 270-216.

(51) Cf. G. Valois, "Formation économique et rémunération du travail, in *L'Action Française*, 20 avril 1920.

(52) Cf. R. Soucy, *French Fascism as Class Conciliation and Moral Regeneration*, *Societas*, autumn, 1971, pp. 287-292.

(53) *Le Nouveau Siècle*, Le 15 juillet 1926.

(54) Cf. G. Valois, *Le Fascisme*, 1927, pp. 34-44.

(55) *ibid.* pp. 17-18.

(56) Z. Sternhell, *op. cit.*, p. 22.

(57) 「フエンー」運動は様々な社会層が参加した運動である、それ故、ヴァロアの思想と運動自体の志向との乖離を当然考慮しなければならない。そこで先ず、第一次大戦後の最大の通貨危機の中で、ヴァロアの運動に参加した中小の企業家層（北部・東部の繊維業者など）がいかなる意図をもってヴァロアの通貨危機に対する解決構想を支持したかを解明すると同時に、それらの社会層の動向を別稿で扱うつもりである。特にヴァロアの通貨問題に関する著作のほかに、ユンジャーヌ・マートン (Eu-

- gèn Mathon)・ジャック・マルチエイス (Jacques Arthuis) などの企業家の見解を知ることが出来る『カイエ・デ・ゼタ・シネロー』(Cahiers des États-Généraux, 1923-1925)が再検討されるべきである。
- (88) Cf. R. Pinon, Les nouvelles conceptions de l'Etat, *Revue économique internationale*, 21<sup>e</sup> année, vol. IV, 1929.
- (89) H. Dubief, *Le déclin de la III<sup>e</sup> République 1929-1938*, 1976, p. 66.